

市民の声でいくさをとめる

おかやまいっぽん共同代表

片岡 達彦



はじめに

2月、総選挙での護憲政党の惨敗。岡山駅前の「市民と野党 手をつなぐ合同宣伝」は、いつも一緒だった立憲民主党の仲間の姿がない中での開催だった。

共産党、社民党、新社会党の代表が、戦争への道を許さないと訴えた。私は市民団体を代表して「市民と立憲野党が国会の内外で手をつなぎ、街頭から平和の砦を再び築いていこう」と呼びかけた。立ち止まって訴えに耳を傾ける人がいつもより多い。総選挙での「高市一強」を憂いている市民の空気を感じた。高齢男性がマイクを握るといふ昔のまま変わらない宣伝スタイル。レジェンドにリスペクトしつつ、ジェンダー平等へ世代継承へと私たちも変わらなければならないと強く思う。

女性、若者のコールが響く

3月19日「平和憲法を守るための緊急アクション」

倉敷駅での初めてのペンライトデモに16人が参加。若者も飛び入りで熱く強烈にアピール。「戦争法反対！倉敷市民集会」を10年以上一緒に続けてきた仲間と「倉敷市民有志」の名前でデモカレンダーにペンライトデモを告知した。ネットでつながり、知らない人が参加した。

参加者の多くは女性。コールも女性が担っている。主催団体はない。デモカレンダーやLINEが情報共有の手段。「戦争はいや」「9条守れ」沈黙はしてられない気持ちに後押しされて駅前に立った人たちだと思う。

5月14日、7回目の倉敷駅前ペンライトデモー 34

人が集った。「高市やめる」はきつくて言いにくい方は「やめて」でも良いです。写真、動画に映りたくない方は、撮影の時はブラカードなどで顔を隠して。スピーチしたい方は、誹謗中傷以外ならどなたでも——初めてガイダンスをしてからアクションスタート。初めてデモ

◆特集 全国に広がる「ペンライトデモ」



日本国憲法前文を読み上げる女性と、言葉の力を
信じて工夫したデザインのプラスターを持って、
ペンライトデモに参加した市民たち

に参加する女性や若者が安心できる空間を作ること大切。「楽しかった」「デモは怖くない」と思ったら、きつとデモ参加のハードルが下がる。

高校生の飛び入りのコール、唄って盛り上げてくれた若者。立ち止まり耳を傾ける若者、こぶしを上げてエールを送りながら通り過ぎる人など、好意的な反応が返ってくる。選挙で涙を飲んだ元国会議員も駆けつけた。参加された女性は「職場は岡山だけど自宅はこちらが近い

ので来た。いま声を上げないと戦争になりそうで怖い」と話した。

「声高に平和を唱えるとデモ参加へのハードルが高くなる」という意見もある。それならば、通行人の心に刺さる言葉をいつも考える。8秒のワンフレーズでも市民の気持ちに届けと願う。

キラキラとペンライトを振って

7月2日、倉敷駅前、14回目のペンライトデモ。「私たちは黙らない」「市民の声でいくさを止める」と、25人がコールした。

強大に見える高市政権は、いま大多数の国民の願いの対極にある国難でしかない。高市改憲を止めることができたなら、日本国民にとつての歴史的な成功体験になる。市民運動に潮の満ち引きはある。勝ち目があるのかどうかは闘ってみないと分からない。いまの暮らしに生き辛さを感じ、行く末に不安を覚える人たちと同じ構造のなかで私たちは苦しんでいる。そんな社会の構造を変えるために抗いたい。希望を持ちたいから、人として尊厳を保ちたいから。沈黙の向こう側に立たされる前に、キラキラとペンライトを振って太鼓のリズムで声を響かせ

(かたおか たつひこ)